

## 〔研究会合宿報告〕

### 女性史研究会合宿報告

七五年度の合宿は、八月二十八日から三十一日まで奈良県高市郡明日香村において行なわれた。合宿の目的は「日頃の活動を基礎に、更により一層の研究活動の充実を目指し、併せて次年度の活動の一助とする」というものであり、今回は特に、「基礎的問題の再検討を中心に自由討論を通じて、会員相互の認識を高める」というのが具体的目標性であった。

まず、始めに女性史というものについて、説明していききたい——女性史という学問自体成立するか否かの問題は、いくつかの歴史論論争を経て語られて、きたわけではあるが、これは方法論によって生じる違いでしかないように思われる。それは、女性史というものを、どのようにして、構想するかということである。女性史というものが対象にする歴史的存在は、女性の全体的実在なのであるから、いわゆる全体史的方法なりが要求されてくるのである。これは、マルクス主義的に下部構造を基軸としたものであり、これ以外の方法は、非歴史的分野に流れてしまうであろう。この方法論は、限界性をもちながらも、これ以外には、女性史叙述は、考えられないのである。しかし、この女性解放論史は、「人民の解放は、婦人解放」といった、安易な図式化であり、女性史といえるかどうか疑問が残るといった提起もあり、ジュリエット・ミッチェルの「女性史とは状況なのである」とする女性史否定論やマーガレット・ジョーシの「女性前史論」などがその代表的な例である。ところで研究会では、女性史というものが一応成立しようという設定のもと

に、(一方に)井上清氏の女性解放論史と(もう一方に)高群逸枝女史の婚姻史の、二つの全体史的方法論をとり、「現実を認識」するにとどまっている。

さて、今回の合宿では、女性史の代表的作品である井上清氏の「日本女性史」(三一新書)の評価と批判を行なった。——この作品は、時代の永続と共に、その歴史性に耐えられなくなり、風化して来ている。これは、米田佐代子女史の「婦人解放」からの批判などによって、完結されているわけではあるが、「近代日本女性史」新日本新書)いまだに、これを軸として他の作品が成り立ち、いわゆるこの作品を乗り越えられるものが少ないといった意味からは、まだ見るに足る面がある。今回の合宿では、井上氏の女性解放論史に対して、部分的にしか批判できないといった研究会の基礎的弱点をさらけ出したが、ここでは、いくつかの論点をとり出していくことにする。

#### (1) 母系制と父系制の移行段階における問題

原始共産制下における母系制の成立を肯定するか否かの問題は、史料的にいつてまったく確証されないが、最古の文献からいくぶん理論的に理解され得るとすると、次の父系制への移行はいかにして行なわれて来たのであろうか。これは、井上氏も云っているように、「家長制家族と私有財産制」の始まりに原因が有るといえる。(エンゲルスは、私有財産制の発生について生産諸力の発展のために社会的分業の展開があり、これが男子の支配過程を推し進めていったと論じている)しかし、たんに母系制が崩壊して私有財産制が発生し、国家の成立がある「古代」そのものは、父系制に達しているという世界史的方法論の押し付けであり、日本の特有現象からす

れば、高群逸枝女史の云う「日本の氏族崩壊期は、(略)父母両系の併存のそれなので、したがって、この期間に家父長専制の大家族形態などのなりたつわけがなく、そのかわりに半壊れの氏族共同体があり……」(女性の歴史)である。そして、原因的にはエンゲルスの云う生産力の発展・分業などとみて正しい。しかし、井上氏の理論は、歴史区分において、母系―父系―古代―封建―近代の図式を、各個無理に振り分けているのではないか――といった問題が討論の中から出てきた。

(2) 封建制の完成と共に、各階級に浸透していった家父長権家族制の分析。

井上氏は、ここでも重大な誤まりを犯している。これも批判されたものであるが、被支配層にあつては、あたかも男女平等の原理が存在したかのごとく書かれている部分があるが、これは、井上氏の「理論」でしかなく、実証的に説明されていない。――女性解放論史の基本的公式「生産勤労者における男女平等」のあてはめにしすぎない。

(3) 特に、女性史の中での基本的問題―婦人労働問題を理解するために、家族制度と共に、資本主義の分析があげられる。

日本の資本主義の分析による論争は、戦前の講座派、労農派によって、行なわれて来たが、研究会においても、同様なパターンが展開された。しかし、女性史的に考えると、高群女史も云っているように「婦人労働の奴隷的性格は、単なるブルジョア初期の原生的労働関係から生まれたものではなく、それは江戸の機織下女からの継承なのであつて、したがつてその基盤には、経済制にも、家族制的にも、江戸封建からのつよい遺制」(女性の歴史)であり、婦人の

奴隷的状态をよく説明し得る。だから、ここでは、講座派の継承者である井上氏の論を一応は評価できるのではないかと思われる。以上の如く簡単に説明してきたが、これらを踏まえた上で、今後の問題として、資本主義制下で最終段階の核家族を総合的に分析し、未来の方向性(共同体的家庭?)はどうあるべきかを討論して、合宿のしめくりとした。

さて、最後として、これからの女性史研究は、従来の式から抜け

出し「史料に立脚した女性史の個別研究を重ねることから仕事を開始せねばならない」(井上輝子)という提言を私たちは、聞きのがすことができないということをつけくわえて、おかねばならない。

(中村記)

合宿参加者

顧問 山口助教

四年 中村 政弘

角田 進

斉藤 恵子

服部 信幸

二年 八屋 克巳



二年 伊藤寿美子 田崎 孝子 小島 哲夫  
 一年 木部 義則

織田信長研究会合宿報告

今年の合宿の目標は、原文書に直接触れてその調査、整理の実施とし、その為にどこかに未整理のまま残っている文書はないかと探してみました折、顧問の所先生より、近世文書ではあるがと、長野県佐久郡上塚原の池田善三家を紹介され、信長とは隔れた時代ではあるが、近世文書を読むのもよいと思ひ、池田家へ御願ひした所、心よく引受けていただけ、九月一日より四日迄、御邪魔する事に決定しました。

八月三十一日昼、まだ真夏の様な残暑の残る東京を後にして信越本線で小諸に着いて、佐久盆地のどこまでも続く黄金色の稲穂のたれ下った中を、小海線にゆられて岩村田へ向ひ、夕開せまり西の山々の頂きが、黒いシルエットとなつて浮かび上り、東京では感じられない、さわやかな秋風が吹いている中を、宿へ向つて行つたのです。

明けて九月一日は、朝、岩村田よりバスで目的地、上塚原へ向ひました。文書を見せていただく池田善三氏宅は、江戸時代長く上塚原村の庄屋を勤めた家で、このあたりの池田家の総本家との事、さすがに立派な門構えでありました。

先生より、ここには文書が膨大にあると聞いていましたが、実際に宗門御改帳だけで98冊、皆済目録、水帳等、総数約数千点にも及ぶ山の様な文書を前にして、どこから手をつけていいものか解りま

信州佐久郡上塚原村人口流動  
 (同村宗門御改帳より作成)

	宝永6年(1709)	享保5年(1720)	享保14年(1729)
村総人口(縁付、奉公を除き 下男、下女を含む)	237 (100%)	233	222
男(比)   女(比)	112(47%)   125(53%)	121(52%)   112(48%)	116(52%)   106(48%)
百姓人口(下男、下女を含む)	180 (100%)	186 (100%)	179 (100%)
男(人口比)   女(人口比)	87(48%)   93(52%)	101(54%)   85(46%)	94(53%)   85(47%)
下男、下女人口	57 (100%)	47 (100%)	43 (100%)
下男(人口比)   下女(人口比)	25(44%)   32(56%)	20(43%)   27(57%)	22(51%)   29(49%)
戸数	39戸	47戸	51戸
本百姓数	15戸	15戸	19戸
抱百姓数	24戸	29戸	32 (他村に掛り2戸)を " 奉公1戸)含む
奉公人数	20人 (100%)	17人 (100%)	19人 (100%)
縁付数(内当村内)	20人 (4人)	43人 (7人)	45人 (3人)

せんでしたが、まず、この中より宗門改帳を取り出し、目録作りを  
始めました。次にその中から五年毎位に、取り出して講読し、カー  
ボン紙を用いて書き写し、一枚は研究会に、もう一枚は池田家に置  
いてきました。次にこの宗門帳より成作した表を右下に揚げます。

合宿日程等により宗門改帳全てから史料を得る事は出来ませんで  
したが、これにより断片的ではあるが、一時期に於ける当村の農業  
形態を察する事ができる。今後の調査によつては、一層はつきりし  
た農業（農村）形態の推移を知る事が出来ると思います。

九月四日迄で、池田家に於ける文書調査を一応終り、五日は史跡  
見学として長野市をめざし、善光寺に詣りました。

善光寺は、天台宗の大勸進と浄土宗の大本願との管理下にある寺  
で『牛にひかれて善光寺詣』で有名な所で、山号は定額山と号し、  
創建については諸説があるが、六世紀に百済の聖明王が献上した阿  
弥陀如来像を安置したのに始まるという伝説もあるが、中世以後阿  
弥陀信仰の隆盛と共に宗派を越えて信仰されている。戦国時代には  
転々と移転されたが、慶長二年（一五九七）現在地にもどつた。

その後、毎々火災に会い現存の建物は江戸以後に建てられたもの  
である。

次いで訪れた上田城跡は、上田盆地の中央に位置し、千曲川岸の  
天然の要害を背に建てられた城で、真田十勇士で有名な真田氏の居  
城である。ここで真田氏に触れてみたい。

戦国期、真田氏は武田信玄、及び勝頼につかえていたが、武田氏  
没落後の天正11年徳川家康につかえ、上田城を賜っている。その直  
後、家康より真田氏の領地上野国沼田を北条氏に割譲せよとの命を

不服として、家康から分れ秀吉につかえたが、これに立腹した家康  
は、大久保忠世、鳥居元忠を使わして上田城を攻めたが、秀吉の仲  
立て和している。

沼田は天正17年秀吉からの命により北条氏に割譲しているが、北  
条氏滅亡後再び真田氏領となる。秀吉死後、家康の上杉征伐に加わ  
るが三成挙兵により父、昌幸、次男幸村は西軍に加わって、上田城  
で秀忠と闘うが、長男信之は東軍に加わっていた。関ヶ原に於ける  
西軍敗退により、昌幸、幸村は捕えられ死罪になる所、長男信之の  
助命によつて高野山に蟄居となった。昌幸はこの地で死去するが、  
幸村は大阪冬の陣に際し、大阪側に組し大活躍をし家康に数度か危  
機を与えたが、夏の陣にて戦死する。その後上田城は信之に安堵さ  
れて、真田氏が受け継がれて行く。

上田城跡は、現在公園となり、見張台等が残され昔の名残りが見  
られる。

上田より（信越線に）再び乗り小諸へもどつて、懐古園を訪れま  
した。

ここは島崎藤村の

小諸なる古城のほとり雲白く

遊子かなしむみどりなすはこ

べはもへず若草もしくによし

なし……………

の詩で有名な、千曲川に面した見晴台より夕ぐれ時の川面をなが  
めていると、川の流れの中に漂っている一枚の枯葉が、自分の様に  
見え、しばし見入らずには、いられませんでした。

今回の合宿は、先に申しました通り信長とは、離れた時代の近世文書と接したわけですが、原文書の調査、整理の実施、近世文書の講読には大きなプラスとなりました。

以上を以って合宿の報告を終わりますが、後期の信研の活動は、引き続き一向一揆の研究（その中でも史料の限界はあるが、伊勢長嶋に於ける一揆を中心に）を行ない、伊勢香取の法泉寺文書の講読、「織田信長文書の研究」の中から、一揆関係文書を撰出し、それによって信長と一向一揆の研究等行ってゆきます。

猶、合宿中我々愚輩に親切に御指導くださった顧問の所先生、心よく文書を見せて下さった池田善三氏には紙面を貸りて御礼申し上げます。

合宿参加者

顧問 所

三年 千原 保・内田 進・亀沢泰隆・後藤正春・田原良平

一年 栗野俊之

近世史研究会より

大学院 木暮正利

二年 並木克央

(田原記)

昭和五〇年度修士論文卒業論文一覽

△修士論文▽

原始時代の墓制について

自由民権運動への豪農層の参加の政治過程

—大阪会議から国会期成同盟の成立まで—

公武合体運動の消長と松平慶永

戦国大名今川氏の権力構造

近世初期における京洛文化の形成とその展開

大正末期の製糸労働者争議に関する一考察

近世における寺社の富籤興行について(昭和四十九年度論題提出)

九年度論題提出)

莊園農民の歴史的性格

吉原細見の研究

△卒業論文▽

プロレマイオス王朝下の農民

ルネサンスの一考察

横浜港市街地における地租改正の展開

明治維新期における外的危機について

秦の始皇帝について

安藤広重・その生涯と近世美術史上の位置

プロレタリア文学運動 —ナルプ解体の意味する

もの—

今井恵昭

岩崎孝和

桑原銀一

瀬戸達也

中西正典

松橋忠美

水谷明嗣

宮本正明

山城由紀子

八巻隆二

服部信幸

藤江忠親

田中仁

小室明弘

山本真由美

中村政弘